CRファクトリー
Community & Relationship

Withコロナ時代の
コミュニティ活動を考えよう

プロフィール　五井渕　利明

NPO法人ＣＲファクトリー　副理事長・事業部長
認定NPO法人かものはしプロジェクト
日本事業部　マネージャー
一般社団法人JIMI-Lab 代表理事
株式会社ウィル・シード　研修講師

妻の夫、２人の娘の父

趣味：ラジオ、筋トレ、仕事

「共に生きたい」をつくる

社会問題と解決策

【現象】

自殺
（2万人）

うつ
（120万人）

予防・軽減
される

児童虐待
（13万件）

孤独死
（3万人）

【解決策】

人と人の
つながりをつくる

愛着ある
コミュニティを増やす

ここの社会基盤
づくりをやりたい

【構造】

人と人のつながりがある
コミュニティが豊か・あふれている
共助・相互扶助・支え合い

団体紹介

【ビジョン（目指す姿）】

すべての人が
自分の「居場所」と「仲間」
を持って心豊かに生きる社会

【ミッション（使命）】

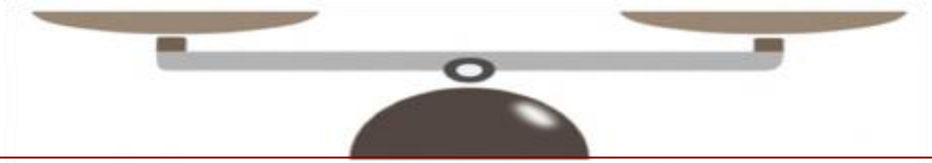
居場所と仲間を感じる
あたたかいコミュニティを
世の中にあふれさせること

団体紹介

「ボランタリーな人々」で構成されるチームで、
「活気あふれた継続的な運営」を実現しながら、
「高い成果」と「人が生き活きと幸せになる組織」
の両方を創り出すことが私たちのテーマです。

【強くあたたかい組織・コミュニティ】

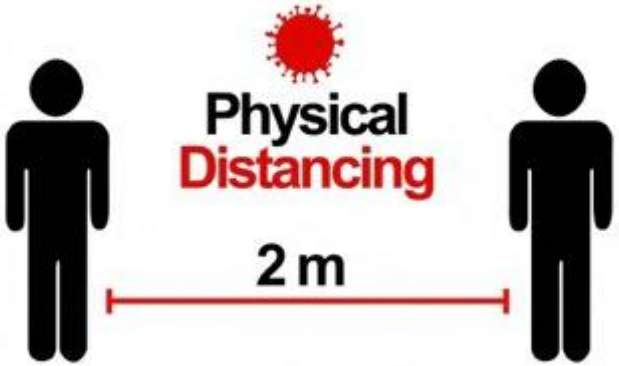
成果 スピード 推進力	楽しさ 居心地の良さ 充実感
強さ	あたたかさ



WITHコロナ時代の団体運営

リアルのイベントやミーティングができない

新型コロナウイルスの感染拡大により、世の中は３密（密閉・密集・密接）を避けなければいけない状況となり、**イベント・場づくり・交流**などを主活動とする多くの市民活動・コミュニティ活動にとっては、ものすごくやりづらい状況となりました。



コロナ時代に起きていること

①リアルなイベントが開催しづらくなった
②リアルなミーティングがやりにくくなった
③高齢者の感染に気をつける必要がある
④リアルな場をつくることへの認識の差
⑤IT・オンラインの得意・苦手の差

緊急調査アンケートから見えてきたこと

私たちの緊急調査アンケートで以下の項目が浮かび上がった

- 日常会話・普段のなにげない雑談が減っている
- 対話・議論・ディスカッションが深まらない
- 関わりの差が生まれている

（CRファクトリー緊急アンケート調査より）

普段、無意識に獲得し合っていた非言語の情報が減ったことによって、前提にズレが生じたり、相手の意図・考えが理解しづらくなる。

それが仕事の成果や進め方に悪影響を及ぼしはじめる。
人間関係がギクシャクしたり、ストレスを感じる場面も。
雑談やランチで得ていた「気晴らし」「ぬくもり」も減る。

ワークショップから聞こえてきた声

オンラインへの拒絶感や格差があるので、対面だけにも、オンラインだけにもできない。

認識の差がある。
「集まればいいんだよ」という人と、「集まるのはこわい」という人と。

まちづくり活動のグループには「どう続ける？」「やめようか？」という声が出始めている。

イベントのメインは交流や雑談だと思っているが、それがオンラインだとかなり難しい。

悩みが言いづらい環境になっている。悩みや不満が見えなくてつかみづらくなっている。

モチベーションや帰属意識が低下している。

オンライン時代に大切なこと

オンライン時代は「今まで自然と無意識に共有・担保されていたもの」に目を向けて、それを意図的につくることが重要

1.前提・背景のすり合わせ

その人が考えていることや疑問・違和感を感じていること。
今どんな気持ちで、仕事以外のことはどんな状況なのか。

2.関係性をあたためること

忙しく孤立しやすい構造のリモートワーク時代には、
支えとやすらぎの人間関係が重要になる。成果・スピードと良い関係性・ケアのバランスを取ることがマネジメント。

3.気持ち・弱さを共有する

その人の気持ち・感情を共有できるチーム。
「人間性を仕事に呼び込む」「心理的安全性」

オンライン時代のキーポイント

■少人数・１対１・個別

Zoomなどのオンラインツールは大人数でのコミュニケーションに向いていない。少人数をいかにつくるかが鍵。
少人数や個別で「温度」や「関係性」をあたためていく。

■短い時間で頻度高く

移動しなくて済むオンラインミーティングは、隙間時間や短い時間での実施がやりやすい。30分や45分や1時間の短めのミーティングや面談を「頻度高く」やるのが良い。

■オンライン化支援・ITツールの手ほどき

通信環境（WiFi）と端末（パソコン・タブレット・スマホ）の整備支援を進めると共に、ITツールへの抵抗感がある方への「個別でリアルな手ほどき」がポイントになる。

これからのコミュニティ活動

オンライン化をどう進めるか

オンラインでのコミュニケーションやケアや会合ができる
環境づくり。オンラインでもつながれるための仕掛けづくり。

①WiFi・タブレットなどオンライン環境の整備

②オンラインでのミーティング・面談実施

③オンラインでのイベント・場づくり開催

リアルな場をどうつくるか

感染対策を徹底した上で、信頼感・安心感のあるリアルな場づくりをどこまでできるか。工夫してリアルもつくりたい。

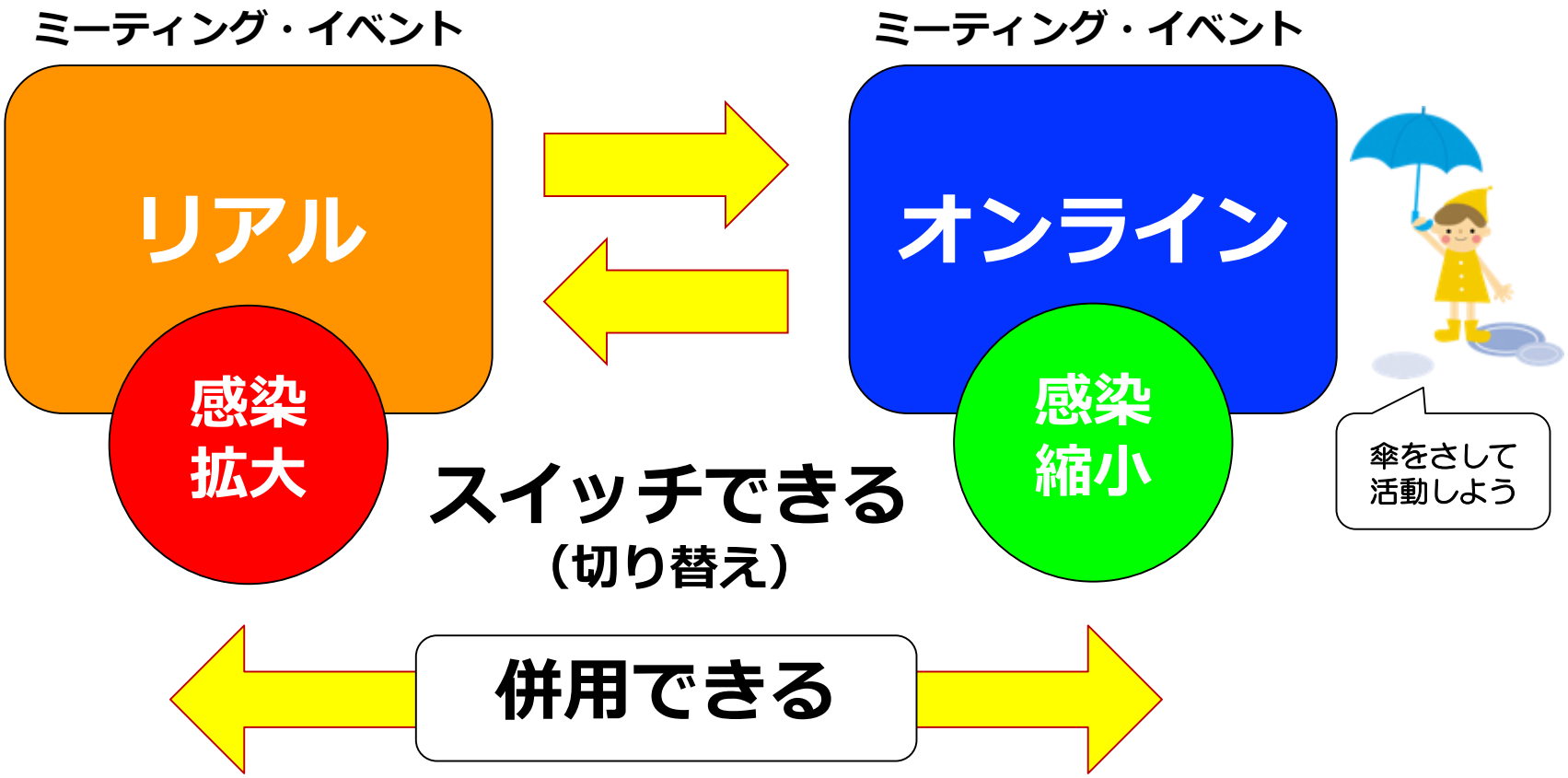
■換気　■消毒液　■マスク着用　■検温

■フェイスシールド　■マウスシールド

■アクリルパーテーション　■参加者名簿

ハイブリッド（併用）運営へのチャレンジ

Withコロナ時代は「リアル」と「オンライン」の両方を併用する「ハイブリッド運営」を目指す。



働き方の変化・マルチ所属・越境交流

新型コロナウイルスの影響で働き方のスタイルに変化が起きた。在宅・リモートワークが増加し、「地域に居る時間」の増加や「可処分時間」の増加は、”仕事以外の余地“を生む可能性がある。

そうなると、会社だけがアイデンティティの中心になりやすい旧来からの働き方のスタイルが変化し、仕事以外にも様々な活動や居場所を持つ「マルチ所属」の傾向が強まることになる。

副業・兼業の波も相まって、複数の肩書を持ちながら「生業活動」と「社会活動」が入り交じるスタイルになっていく。オンラインは「越境」での活動にも向いていて、マルチ活動・マルチ所属が進む。

リアルな場・対話・共通体験の価値向上

オンライン化・デジタル化・非接触技術に囲まれていく日常の中で、相対的にリアルの価値が上がる。

キーワードは「リアルな場」「五感」「身体性」「対話」「共通体験」。リアルな体験や交流の中で心が動いたり、じんわりと癒やされたり、インスピレーションが湧いたりする時間の価値が上がる。

普段のコミュニケーションがオンライン化されるからこそ、要所要所のリアルをみんなで思いっきり時間を割いて楽しむような流れが来るでしょう。

4. つながり格差の拡大の可能性

コミュニケーションや場のオンライン化によって、「つながる主体性」が今以上に求められるようになる予感がしています。

与えられる「コミュニティ」と「つながり」から、自らが主体的に獲得する「コミュニティ」と「つながり」への構造変化です。

そのとき「つながる意欲とスキル」の差が、「つながり格差」につながっていく可能性があります。

「つながること」を個人任せにしない機会の保障や、社会環境づくりを考えていきたいです。

これからのコミュニティ活動

1.かたちを変えても続けること（進化する）

情熱・想い・心のエネルギーがあれば、今も活動は続いているし、これからも活動は続く。柔軟・進化の姿勢。

2.自分たちの根本を見つめ直す

形が変わっても残る「自分たちの使命・価値は何か？」。問題意識、社会的役割、強み、願い、など、そこが深くわかれば、いくらでもやり方は見つけていけるはず。

3. 中長期的な視野に立つこと

今は不安と混乱の最中。2年後にはAfterコロナがやってきて、ミーティングもイベントも懇親会もできる。
人間と社会にとっての「コミュニティ」と「つながり」の重要性は変わらない。それを創り出せる市民活動・コミュニティ活動には価値がある。がんばろう。